

する。

#### Q&A (案)

Q：6ヶ月のこどもですが、そろそろ2回食にすべきでしょうか？

A：決まりがあるわけではありませんが、離乳食を開始して1ヶ月ほどたち、上手にゴクンと飲み込めるようになったら始めてみましょう。すぐに量を2回分で2倍量にする必要はありませんので、赤ちゃんの食欲に合わせ、2回目は1回目の半量以下から始めてみましょう。

Q：5ヶ月で離乳食をはじめて1ヶ月経つのに、食べる量が少ないです。いつになったら2回食に進めていいのでしょうか？

A：まず、母乳やミルクが頻回で量が多すぎているのでしょうか？調理の形態はなめらかで食べやすいものでしょうか？授乳と離乳食との時間はいかがですか？1回にたくさん食べられず、すぐに疲れて泣いてしまう赤ちゃんもいます。2回食に分けると、1日のトータル量が増えることもあります。

### 3) 地域に於ける低出生体重児母親への育児支援状況について

S県下における低出生体重児母親への育児支援状況について22カ所の保健所事業概要(平成13年度)をみた。低出生体重児への地域支援は未熟児養育指導実施要領に基づき、殆どの保健所で家庭訪問、教室、相談窓口などを通じて何らかの形で行われている。保健指導は、多くて12回、少なくても3回程度、内容・方法も異なるようであり、栄養士による栄養指導と記されたのは極わずかであった。いずれの保健所においても、保健所で対応した件数は低出生体重児対象数に比べると少ないようにも感じられ、低出生体重児の母親にとって保健所は身近な存在ではないように思われる。一方、同じS県下において「保健所を中心とした地域主導型のハイリスクの育児支援」研究(平成11年度厚生科学研究報告書)が9保健所で行われている。これが地域主導型の充実した事業のきっかけになりその後の展開にもつながっている例もある。9保健所の中のA保健所、S市子育て支援センターでは事業を通じて低出生体重児経験の母親達から同じ境遇にある母親への応援の為に「陽の当たる方へ」と題した自分の

経験を綴った文集が作成されている。しかし、そのまま継続となると色々難点もあるようであり、研究班活動終了の時点で保健所それぞれの事情に併せ、事業の形も変わっているのが現状である。

研究結果では低出生体重児の母親は保健所の事業を通じて「発育、発達は様々であることが分かり安心した」「同じ境遇にある母親と話し合えたこと、友達になれたことが有意義であった」などを述べ、保健所での支援事業について参加した母親全員が希望していると述べられている。

低出生体重児の母親に対する地域主導による育児支援状況について文献検索を行った。

地域保健法(平成9年)で保健所は専門的なサービスを行う機関として位置づけられているが、まだ試みの段階であり、軌道に乗った活動が出来ているところは極少ない現状である。保健所側、医療機関の多くの意見を集約すると、保健所側は低出生体重児の母親の多くに心身の疲労が多い為にゆとりを持った育児を行って欲しい。その為には心配事解消の為の身近な相談窓口の充実、家事・育児ヘルパー、一時保育、同じ境遇の人が集まる場、親子が遊べる場の充実などの環境整備が必要であるなどの意見や実際に試みているところがあり、また訪問診療の検討を行っているところもある。

一方病院側は低出生体重児に対応する時間は限られており、母親が満足できる程の対応は難しい。同時に栄養の問題や発達の問題、育児の問題など十分に対応できないこともある。保健所にはそれぞれの分野の専門家が揃っているなどであった。

双方に共通することは保健、医療の連携の必要、大切さである。双方が積極的に保健機関から医療機関へのアプローチ、医療機関から保健機関へのアプローチを行うことが重要となる。

#### D. 考察

今年度は、特に極低出生体重児における食事状況や母親の抱える不安を知るために、昨年度対象者を追跡する形でアンケート調査を実施した。その結果、多くの母親が健診時に医師の指導を受けて離乳食を開始し、普段離乳食を進める上では、育児雑誌や離乳食の本を参考にし、その後心配なことは健診時に医師に相談していた。信頼関係が築けた中で、診察時に医師から助言を受けることで安心できる母親が多いと思われた。ただ、診察時の医師の対応のみでは栄養の話題や具体的な離乳食等の話に満足が得られる程に十分でないこともあることが

ら、離乳食指導を受けた経験に対して「受けたことがない」という回答になったと考えられる。

たとえば、Case 1のように発育、発達も順調で、母親が特に不安を感じていない場合でも、間食のことなど、気になる点がみられる。また、Case 2では、第1子で、体格が小柄であり、母親は離乳食や食事について困ることなどをたくさん挙げていたが、いろいろな工夫もしており、栄養摂取量に関しては概ね良好であった。従って、母親の不安や心配という観点からのみでなく、実際の食物摂取状況等を把握し、家族や児の状況に合った個別の栄養指導が望ましいと考えられる。

今年度、栄養摂取量についての調査を試行したので、今後の栄養調査の方法を検討し、また、この研究において栄養調査に協力してくれた母親に対して、不安軽減に役立つような形で分析結果を返していけるよう、その方法についても検討する必要がある。

離乳食で困ったり迷ったりしたことについては、第1子の母親に多くの項目が挙がっていた。極低出生体重児に限らず、初めての育児では、離乳食に対する不安が大きいと推察される。特に離乳食の作り方に関しては、実演を伴った形で指導や具体的な助言が母親にとって安心につながると考えられる。また、今年度は、チーム医療に取り組む別の医療機関においても昨年度と同様な調査を実施し結果をまとめている段階であるが、併せて発達外来の窓口栄養士等の専門職が参加することで、栄養についての母親の不安をどの程度軽減できるのかについて今後検討したい。今回一部を紹介したQ&Aのような形で、低出生体重児に対しても栄養指導のポイントを具体的に示していくことは、一つの方法であると考えられる。

低出生体重児では、発育、発達の個人差も大きく、さらに家族の状況等様々な違いを考えると、画一的なマニュアルでは対応しにくいと思われる。児の発育を適切に評価し、摂食機能などの発達段階に合わせた栄養指導を行っていく必要があり、また専門職の柔軟な対応が望ましく、そのためには、指導の統一性、一貫性が損なわれないように、目安となる指針が必要であると考えられる。医療機関と保健機関の連携した指導となると、1人の母親、家族に係わる専門家数は多くなることが予想され、その必要性は一層重要であると思われる。

最後に、今回2回目のアンケートをお願いしたところ、多くの母親からすぐに回答をいただき、さらに、質問に対する答え以上の情報を提供してくださった方があった他、「自分の経験

が同じ立場のお母さんたちの力になればと思っているので、アンケートを通して協力できてうれしく思う。」とのコメントを記載された方もあった。低出生体重児のために、医療機関の他、地域での育児支援として、さまざまな試みがなされており、経験者の助言や経験者との交流も、低出生体重児を育てる母親や家族の不安軽減につながることを期待される。

#### E. 結論

低出生体重児を育てる母親及び家族に対して、育児不安軽減につながる栄養指導を進めていくためには低出生体重児の特性を踏まえ、具体的に活用しやすい指針等の必要性、また育児不安軽減の為の場の提供が望ましいと考える。

同時に母親及び家族にとって有効な指導体制として、保健機関と医療機関それぞれの特性を活かした連携体制が重要であり、母親、家族の為の連携体制について十分な検討が必要である。

F. 健康危険情報                    なし

G. 研究発表                        なし

H. 知的財産権の出願・登録状況                    なし

研究成果の刊行に関する一覧表

書籍

著者氏名	論文 タイトル名	書籍全体の編 集者名	書籍名	出版社名	出版地	出版 年	ページ
板橋家頭夫	新生児の栄養	社団法人 日 本産婦人科医 会	研修ノート 66 新生児のプラ イマリケア	社団法人 日本産婦人 科医会	東京	2002	33-40
板橋家頭夫	新生児・未熟児 の栄養	埼玉県	母子保健マニ ュアル(平成13 年度改訂版)	埼玉県健康 福祉部こど も家庭課	埼玉	2002	60-67
板橋家頭夫	新生児の栄養	白木和夫、前川 喜平	小児科学 (第2版)	医学書院	東京	2002	463-469
板橋家頭夫	低出生体重児 の動脈管開存 症	山口徹、北原光 夫	今日の治療指 針	医学書院	東京	2003	884-885

雑誌

発表者氏名	論文タイトル名	発表誌名	巻	ページ	出版 年
Itabashi K, Miura A, Okuyama K, Takeuchi T, Kitazawa S	Estimated nutritional intake based on the reference growth curves for extremely low birth weight infants.	Pediatrics International	41	70-77	1999
板橋家頭夫、辻敏敏.	極低出生体重児の発育に関する検 討-10~15歳の発育について-	日児誌	103	420-426	1999
Yamazaki T, Kajiwara M, Itabashi K, Fujimura M.	Low-dose doxapram therapy for idiopathic apnea of prematurity.	Pediatr International	43	124-127	2001
中村利彦、板橋家頭夫、 小川雄之亮	NICUにおけるオゾン水による手洗 いの有用性-他剤手洗いによる手 荒れとの比較検討-	未熟児新生児誌	12	205-208	2001
竹内可尚、長秀男、山下 行雄、御宿百合子、小川 雄之亮、清水浩、高田栄 子、板橋家頭夫、板倉敬 乃、中村利彦ほか.	早産児および慢性肺疾患患児にお ける palivizumab の安全性および 薬物動態の検討	日本化学療法学会 雑誌	50	215-222	2001
Ogawa Y, Itabashi K.	Home therapy: Oxygen and nutrition	Pediatr Pulmonol	suppl 23	132-134	2001
板橋家頭夫	新生児領域で使用される輸液製剤 中のアルミニウム含有量の検討.	日本小児臨床薬理 学会雑誌	14	27-30	2002
Nakamura T, Ezaki S, Takasaki J, Itabashi K, Ogawa Y.	Leukemoid reaction and chronic lung disease in infants with very low birth weight.	JMaternal-Fetal and Neonat Med	11	396-399	2002
Itabashi K, Saito T, Ogawa Y, Uetani Y	Incidence and predicting factors of hypo-zincemia in very-low-birth-weight infants at near-term postmenstrual age.	Biol Neonate	in press		2003

斎藤孝美、板橋家頭夫	新生児の栄養障害	周産期医学	31	402-408	2001
板橋家頭夫	低出生体重児のミネラル、ビタミンD必要量	THE BONE	15	651-655	2001
板橋家頭夫	小児の症候群：TORCH 症候群	小児科診療	64 (増刊号)	447-448	2001
板橋家頭夫	新生児管理の最近の話題	日本産婦人科学会 埼玉地方部会誌	31	112-117	2001
板橋家頭夫	未熟児クル病（未熟児代謝性骨疾患）	ホルモンと臨床	49	893-899	2001
小俣真、板橋家頭夫	新生児けいれんのタイプと成因	小児科	42	1211-1216	2001
市川知則、板橋家頭夫	赤ちゃんの不思議：赤ちゃんの急激な発育はどうして起こるの？	周産期医学	31	961-963	2001
板橋家頭夫	新生児未熟児の栄養管理－極低出生体重児を中心に－	静脈経腸栄養	16	29-37	2001
板橋家頭夫	低出生体重児の栄養	周産期医学	31 (増刊号)	621-623	2001
松井朝義、板橋家頭夫	新生児の栄養と代謝	周産期医学	31 (増刊号)	394-396	2001
板橋家頭夫	低出生体重児の経静脈栄養	JJPEN	23	379-386	2001
大日向涼子、板橋家頭夫	極低出生体重児の人工乳の課題	Neonatal Care	14	876-885	2001
板橋家頭夫	新生児に対する栄養輸液の考え方	周産期医学	32	1507-1511	2002